

佐々木博美様

あなたが天国へ帰られてからはや一月近くが経ちました。

この2年ほどは転倒を繰り返されたり、呼吸が急に苦しくなって会話も途切れ途切れになるなど、健康状態が優れない状態が続きました。なにもお手伝いができぬまま目の前から去られたこと、いまだに気持ちの整理がつきません。

私が佐々木さんに初めてお会いしたのは2012年頃でしょうか。ISOでの国際標準化が始まって間もない2011年1月に日本が中心となって漢方領域の国際標準化をテーマにTokyo Forumを浜松町の芝弥生会館で開催し、そこで日本の漢方関連企業を代表して発表されたことは存じていましたが、その時は私もお手伝いで伺ったため、深くお話しすることはありませんでした。

ISO/TC249に対応するため、当初JLOMでは、津谷喜一郎先生（当時東京大学）や元雄良治先生（同、金沢医科大学）、関隆志先生（同、東北大学）に日本代表をまとめるリーダー的な役割をお願いしてきましたが、これらの先生がご自身の健康や所属大学の事情で国際会議の第一線を退かれると、2005年時の結成時からJLOMを支えてこられた鳥居塚和生先生が事務総長として全体のとりまとめをされるようになりました。昭和大学で教授になられてまだ間もなく、ご多忙な時期にあった鳥居塚先生が頼りにされたのが佐々木さん、あなたでした。

経営危機を迎えたツムラの再建に尽力し、国際戦略についても積極的だった元社長、風間八左衛門氏（故人）の下で国際本部長を務め、FDAにも広く交友関係を持っていたあなたは鳥居塚先生のよき相談相手でした。私はちょうど両親の介護が多忙になり始めた時期でしたが、鳥居塚先生の研究室で事務総長補佐となった佐々木さんを紹介してもらったように記憶しています。ツムラ退職後、ロート製薬研究開発の第一線でお勤めになった経験を持つ佐々木さんでしたが、当時まだ若かった私にも腰を低くして接していただき、「いいおじさんだなあ」というのが私の第一印象でした。

2013年に南アフリカで開催されたTC249第4回総会も往路の飛行機からご一緒しました。父を看取った直後で体調が優れなかった私は冷房の効いたエミレーツ航空で体調を崩し、トランジットでドバイに着いた時にはひどい悪寒に震えていました。心配してくれたあなたは、あの巨大なドバイ空港を一緒に歩いてくれましたね。とにかく身体が冷えていた私は少しでも身体を温めようと色々なお店に入ったのですが、あとで「東郷先生はとにかくよく食べる」と言って笑われたのには閉口しました。

南アフリカ会議後、次年度のTC249会議を京都で開催することが決まり、それから1年間は準備で忙しい日々を送りました。鳥居塚先生も南ア会議ではHoDを務め、日本開催に向けて資金集めや会場との折衝に奔走する中で大腸がんが発覚し、昭和大学内で病室とご自身の研究室とを行き来する日々を送るようになりました。JLOM事務総長職も当時、北里

大学の東洋医学総合研究所所長を務めていた小田口浩先生に代行をお願いすることになり、京都会議の打ち合わせも北里大学の EBM センターで行うようになりました。佐々木さんとも EBM センターでお会いすることが増えました。EBM センターでは若杉先生をはじめ、スタッフの方が大変気持ちよく協力してくださり、鳥居塚先生がいない厳しい状況ながら北里での打ち合わせは楽しい時間となりました。

京都会議では日本のホスピタリティを世界に示そうと様々なチャレンジをしましたが、佐々木さんが一番苦勞されたのは、中国に加え、インドから訪れる代表のビザの発行問題だったでしょう。誰が来るのか直前までわからずやきもちしたことを覚えています。

ISO/TC249 第 4 回会議(京都会議)は 2014 年 5 月 26 日が初日でした。二日前の 24 日、準備のために京都に発つ前に昭和大学病院に寄り、鳥居塚先生をお見舞いすると、もう先生は口もきけない状態でした。身体を少しさすったあと、「行って参ります」と病室を後にしましたが、品川を新幹線で発って間もなく、奥様から鳥居塚先生が亡くなったことをお知らせいただきました。

新幹線の車中から「鳥居塚先生が天に帰られました」とあなたにメールすると、「本当に鳥になってしまわれたのですね」と返事が返ってきました。思いもかけない詩的な答えに驚きつつも、鳥になった鳥居塚先生が天から見守ってくださっているような、不思議な気持ちで京都に入りました。

京都会議は鳥居塚先生から託されて HoD の大役を務められた村松慎一先生(自治医科大学)のご活躍もあり、様々なトラブルに見舞われたものの無事に全日程を終えました。参加国の代表からは今でも「あの京都会議は TC249 の歴史に残る素晴らしい会議だった」と絶賛されますが、その陰に佐々木さん、あなたの活躍があったことをみんなが知っています。

鳥居塚先生の葬儀が行われたのは、京都会議が終了した翌日でした。午前中の武田薬品京都薬用植物園でのエクスカージョンを終え、各国の代表を見送ると私は午後の新幹線で帰京、上野駅に行くと、多くの関係者が公園口から寛永寺に向かっていました。葬儀では会議場で使った横断幕の切れ端を棺に入れてもらい、鳥居塚先生への報告の代わりとさせていただきます。葬儀後、たまたまご一緒した豊玉速人氏(医学中央雑誌刊行会)と小田口先生と近くの居酒屋で故人を偲ぶ中、「事務局は本当に大変だ。次は佐々木さんがそうならないようにしないと」と話したものでした。

鳥居塚先生逝去後、事務総長代行として京都会議運営を指揮された小田口先生に代わり、私が事務総長に就任すると、ここから佐々木さんとの二人三脚での事務局体制が 3 年間続くことになりました。JLOM は ISO だけでなく WHO の ICD 改訂事業にも関わっており、2014 年当時は β 版も編集途上で忙しい時期でした。WHO 事業は日本東洋医学会の用語病名分類委員会を主たるプラットフォームにしていたため事務局業務も複雑でした。これら WHO 事業に加え、ISO に関わる様々な業務がのしかかってきました。ほぼ毎日のように ISO から届くドキュメントや投票案件の管理、GD 登録業務だけでも大変なのに、JLOM は

2010 年以降、経済産業省からの業務委託を受けていたことから、関連書類作成に追われる日々を送ることになりました。委託事業では事業開始前の綿密な計画作成が要求されますが、TC249 会議は流動的な要素も多く、年度途中での計画修正の余地を残しておく必要があります。この塩梅がとても難しかった。書類作成のうち概要目的や鍼灸部分等は私が分担しましたが、実務部分の細かい修正や準備などは佐々木さんが一手に引き受けてくれました。これが可能になったのは、佐々木さんが経産省と JLOM の間に入った三菱総研の担当者と密に連絡を取り合い、信頼関係を築きあげていたからです。

事務総長職は 2016 年に伊藤隆先生、2019 年度からは矢久保修嗣先生が引き継がれましたが、佐々木さんはその後も 10 年近く長きにわたり歴代事務総長を支えてこられました。2016 年にマーガレット・チャンはじめ、多くの WHO 要人を迎えた、東京国際フォーラムでの WHO 会議の成功も佐々木さんの事前の準備に多くを負っています。

理系出身らしい厳密さを愛する性格と、身内であっても妥協を許さない清廉さは、B 型の私には時に頑固に映りましたが（佐々木さんは O 型でしたね）、一方で標準化に関わる全ての方が安心して会議に出かけられるように、二重、三重にセーフティネットを用意される周到さを兼ね備えていました。これはなかなか表からは見えない部分です。

元々はラグビー選手のようにがっしりした体格でしたのに、最後の 2 年はとてもお痩せになって、歩くのもままならない様子でしたが、お元気なときはよく会議や打ち合わせ後に食事をご一緒しました。ビールが大好きで浜松町の貿易センタービルの地下にあったビアレストランでもソーセージやポテトなどが好物でした。一方で野菜が大嫌い。料理の中にピーマンが入っているとひとつひとつ取り除いていました。「野菜も食べた方がいいのに」と言っても「僕、もともと偏食だから」と逆に胸を張って取り合いませんでした。甘いものも大好きで、四ッ谷にある鯛焼きの名店「わかば」を教えてくれたのも佐々木さんでした。

企業退職後の、佐々木さんの第二の人生は JLOM に全て捧げられたと言って過言ではありません。ツムラ、ロート製薬で開発部門のエキスパートとして活躍されてきた佐々木さんにとって、JLOM での地味な事務作業がどれだけ生きがいに思えたかは知るよしもありませんが、多くの東洋医学関係者が恩恵を受けたことは間違いありません。ありがとうございました。

天国で飲むビールの味はどうでしょうか。先に行かれた鳥居塚先生と楽しく飲まれている姿を想像しています。

どうぞやすらかにお休みください。

令和7年10月6日 東郷俊宏